

観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



公益社団法人国際観光施設協会
フェーズフリー研究会
㈱NTTファシリティーズ カスタマーソリューション
本部 プロジェクト開発部 担当部長

石原 智也

鳴門市といえはうず潮を思いうかべる方が多いのではないのでしょうか。本州から明石海峡大橋・淡路島をへてうず潮を眺めながら大鳴門橋を渡ると鳴門市。まさに四国の玄関口に位置していますが、交通の要所となっている国道11号沿いに道の駅 くるくる なるが2022年4月にオープンしました。鳴門市によると初年度の入場者数は約119万人、2023年度は130万人を超えていてとても賑わっています(図1・2)。

人口減少・高齢化への対応と 災害対策の必要性

鳴門市は1995年をピークに人口が減少しており域内産業が衰退、転出者のうち約3割が仕事を求めて市外へ流出している現実があります。人口減少と並行して高齢化により地域コミュニティが衰退し賑わいやまちの魅力が低下していました。また、観光入込客数も減少傾向(2006年の約300万人をピークに約200万人程度まで減少)で、これは道路網



図1 前面駐車場からの全景



図2 多くの人でにぎわうエントランスまわり

の整備などにより観光客・移動者の行動範囲が広がり、周辺観光地との競争にさらされて域内消費の喚起という観点から大きな機会損失となっていました。

一方、今年8月8日に起きた日向灘を震源とする宮崎県南部で最大震度6弱の地震が発生し南海トラフ地震臨時情報「巨大地震注意」が初めて発表されたが、鳴門市には中央構造線活断層帯の鳴門断層や鳴門南断層による直下型地震への対策が求められており、災害に負けないまちづくりの推進が急務となっていました。

このような地域の課題を解決するために、地域内外から新たな人の流れを呼び込み交流人口拡大や地域活性化を図る交流拠点となる平常時の機能と、非常時には道路利用者や市民の避難活動や支援活動の防災拠点としての機能をあわせもつ「フェー

ズフリー」を開発のコンセプトとしてくるくる なるとは生まれました。

フェーズフリーを設計コンセプトに

鳴門市は恵まれた自然環境や歴史、文化、産業、観光など多様で魅力あふれる地域資源を活かして愛着と誇りを育みながら、だれもが「鳴門市に生まれて良かった、住んで良かった、訪れて良かった」と実感できるまちづくりの実現を目指しています。また、四国の東北端、本州と四国を結ぶ四国のゲートウェイに位置する立地を活かした“新しいにぎわい創出施策”として「鳴門市四国のゲートウェイ推進プロジェクト」を策定し、地域の長所を活かしながら「交流人口の拡大」や「新たなブランドづくり」に取り組んでいました。

こうしたまちづくりの状況を踏まえて憩いや情報の受発信、賑わいづ

ものへのホスピタリティ フェーズフリー観光施設 道の駅 くるくる なんと

公益社団法人国際観光施設協会 フェーズフリー研究会
(株) NTT ファシリティーズ カスタマーソリューション本部 プロジェクト開発部 担当部長

石原 智也

くりの機能を持ち合わせた道の駅の整備にあたり、「人が集い 出会い 交流し 地域に広がる 笑顔と元気うずまく 道の駅」を道の駅の全体コンセプトに設定し、設計コンセプトのひとつに「フェーズフリー」の観点を取り入れて計画は進められました。

フェーズフリーの主な機能

フェーズフリーをデザインする際の視点のひとつに災害発生からのタイミングがあり、平常時から①災害予知・早期警報、②災害発生、③被害評価、④災害対応、⑤復旧復興の順にその機能と役割を表1のように整理して計画されています。順をおってその内容をみてみましょう。

①災害予知・早期警報：施設前面をガラス張り

日常時は、自然光を取り込むことで照明コストを削減。施設が明るい雰囲気包まれ、快適性と開放感にあふれています。非常時は、気象状況や建物周辺の災害状況をすばやく察知することができます。

②災害発生：施設屋上の子どもの遊び場、見晴らしデッキ、ジップライン

日常時の屋上は駐車場から離れて安全で自由に遊べる憩いの場となり、非常時には津波からの避難場所となります。普段から使い慣れている場所への非難をスムーズに行なうことができます(図3)。

③災害評価：着脱が容易な天井材・点検口(コスト・デザイン・機能を両立させた材料選定)

日常的にメンテナンスしやすい材料・方式を選定することで、非常時にも設備の損傷具合を把握しやすくなっています。

④災害対応：人工芝のスロープ、渦潮滑り台

屋上からのスロープは子どもの格好の遊び場となり、屋内2階から設置された渦潮をモチーフにした滑り台も非常時には有効な避難経路となります。

⑤復旧復興：圧縮展示、バックヤード・倉庫

地元の加工品やブランド商品を販売する1階物産館は賑わいを感じ

る豊富な品ぞろえをしており商品を楽しみながら手に取ることができます。非常時には施設内の食料を始めとする商品を避難者へ配布し緊急避難に対応できます(図4)。

道の駅とフェーズフリー

くるくる なんととは徳島県内で18番目に開業しましたが、1993年に正式登録が始まった道の駅はこの夏で全国に1221駅あります。もともとは「休憩機能」、「情報発信機能」、「地域の連携機能」という3つの機能を備えて始まりましたが、新潟県中越地震、東日本大震災、熊本地震などの災害支援に一役買ったことで、一時避難場所、緊急車両の中継基地等の役割を果たすようになりました。

この流れのなかで地域振興と災害対応の両立を企画時点から目指して、フェーズフリーをコンセプトに建設されたくるくる なんととは今後の道の駅のお手本となることが期待されます。

非常時のサイクル	機能	平常時の役割	非常時の役割
①災害予知 早期警報	施設前面をガラス張り	・ランニングコストの低減 ・快適性と開放感の向上	雨雲等の気象状況の早期察知が可能
②災害発生	施設屋上における芝生広場、見晴らしデッキ、ジップライン	・憩いの場や交流機能 ・アクティビティ機能の付与による集客コンテンツ	避難場所(津波)
③被害評価	脱着が容易な天井材・点検口	・メンテナンスしやすい仕様 ・イニシャルコストの低減	設備の損傷具合の状況把握を通じた被害の「見える化」
④災害対応	・人工芝を敷き詰めたスロープ ・渦潮をモチーフにした滑り台	・子どもの遊び場(そり遊びなど) ・遊具	避難動線及び救援隊(車両)の動線
⑤復旧復興	バックヤード・倉庫	商品の保管場所	避難者への食料供給

表：表1 フェーズフリーの主な機能(鳴門市資料より)



図3 地上からスロープで上られる屋上遊び場



図4 地域の名産品がならぶ1階物産館